

## 第 27 回 (2020 年度) 学会賞選考委員会報告

### 【学術賞】

該当なし

### 【奨励賞】

朴光駿『朝鮮王朝の貧困政策―日中韓比較研究の視点から』 明石書店、2020 年 5 月

学会賞選考委員会

野口定久 (委員長)、堀越栄子、米澤旦、阿部彩、上田眞士、福澤直樹

### 1. 選考過程

2020 年 10 月の幹事会で上記 6 名が学会賞選考委員に委嘱された。第 1 回選考委員会が石井まこと学会長参加のもと、新型コロナウイルス禍の中で ZOOM 会議が持たれ、委員の互選により野口定久を委員長に選出した。その後、2020 年 11 月 25 日付けの Newsletter において、学会賞候補作の推薦 (自薦・他薦) についてのお願いを会員向けに公示した。

第 2 回選考委員会を 2021 年 1 月 25 日に ZOOM 会議で開催した。会員から自薦・他薦された著作の可否判断に加えて、会員の著作と思われる図書をデータベースより検索しリストを作成した。第一次選考として、第二次選考の対象とする著作の絞り込みを行った。その結果、12 著作を第二次選考の対象として選出した。

第 3 回選考委員会を 2 月 24 日に ZOOM 会議でもって開催した。第二次選考の対象とした 12 著作の中から、学会賞として表彰するに値する研究内容であるか、新しい視点を含んでいるか、今後の活躍が期待されるかなどを総合的に検討し、最終選考の対象として 3 著作を選出した。

第 4 回選考委員会は、3 月 25 日に ZOOM 会議によって開催された。最終選考の対象となった 3 著作に対して選考委員全員がそれぞれの視点から講評を述べ、学術賞・奨励賞の対象にふさわしい研究水準に達しているかについて、詳細な検討を行った。その結果、奨励賞として上記の著作を選定することを決定した。

### 2. 選考理由

朴 光駿『朝鮮王朝の貧困政策―日中韓比較研究の視点から』 明石書店、2020 年 5 月

本書は、終章を含む全 9 章で構成され、本文 493 頁に及ぶ大作である。執筆方針と研究の範囲は、朝鮮王朝の貧困政策を、第一部「東アジア貧困研究の歴史比較アプローチ」、第二部「朝鮮王朝の貧困政策」、第三部「比較社会政策史への問いと事例研究」に分け、予防的貧困政策、事後的貧困政策、貧困児童保護政策の視点から、特に朝鮮王朝史 (1392 年―1910 年) と同時期の中国、日本の比較研究に新たな研究の意図が読み取れる。本書の特徴は、①

この時期の東アジアを「儒教と法家の地域」としてとらえ、文化思想面から3か国の比較を行っている。②比較研究方法のこだわりは、朝鮮王朝、中国、江戸期日本において「実施されなかった政策」と「起きなかった歴史的事実」を発見する可能性を見出している。③朝鮮王朝が施行しなかった政策を追求していくと、朝鮮王朝は、「多くの政策を行っていたという結論」を導くことができたことと明示している。④終章において現代社会政策と関わるいくつかの論点（福祉社会の条件とモラルハザード、福祉ミックスと市場の極小化問題、共同体における制度と人間）に敷衍して言及している。全体として東アジア社会政策史比較研究の新たな地平を切り拓く学術論文として高く評価できる。

また、研究方法論としては、「民衆により注目すること」、「微視史の資料・研究をより重視すること」など、東アジア比較貧困政策史の研究に際して的方法的アプローチを議論し、それに基づく「第二部」の実証的記述では、多くの先行研究・史料にあたりながら、「予防的貧困政策」（還穀制度）、「事後的貧困政策」（賑恤政策）、「貧困児童保護政策」を細部にわたって描き込まれている。

他面、本著には、以下のような弱点・難点も見られる。第1は、結論部における共同体崩壊に関する記述（467頁、「共同体における制度と人間」）など、経済史や社会学で共有されている理解とは距離のある独自の説明がなされる箇所が見られ、それらの主張を根拠づける説明や典拠の提示が十分とは言えない、また制度の論理の解釈にあたって、多少図式的に過ぎるかと思われるところもある、との選考委員の意見を挙げておく。また、ある程度の異論も想定されるが、それは今後のさらなる活発な議論を促すものであり、本書の学術的価値を損ねるものではないと考える、とも評されている。第2は、概念の使用や推論についてはやや慎重さにかけると感じられる部分が見られることである。例えば、12世紀の中国思想家（朱熹）に対し、「ケインズ主義」、「新自由主義」といった使用に注意深さが求められる概念を用いた形容がなされるなど（251頁）、概念の使用や歴史解釈に関して、より丁寧な記述が必要と考えられる箇所が複数指摘された。これらの点は、経済政策思想史等の蓄積を吟味したうえで議論の俎上に載せられることを希望するものである。また、本書が翻訳か否かという委員会での論点について意見が交わされた。精査のうえ、本書は、韓国語で2018年に出版されたものの翻訳本であること（著者本人による翻訳）が判明し、著者による日本語版の出版という理解で良いとのことと一致した。以上により、本書が奨励賞にふさわしいものと判定した。

最後に、受賞に至らなかったものの、最終選考の対象となった2著作について、簡単に講評しておく。

上田修『生産職場の戦後史—戦後日本における重工業の発展と技術者・勤労担当者の取り組み』御茶の水書房、2020年12月

本書は、戦後日本—1950年代—1980年代—における造船業および鉄鋼業の「生産設計」方式や「計画値管理」方式をめぐる生産活動について、3つの論点（①経営近代化と現場監

督制度の改革問題、②現場監督制度改革による監督機能の強化、③経営民主化と従業員制度の再編)を時系列に、生産現場の実例を示し、国際競争力を獲得した特徴と要因をまとめたものである。また、本書は労働研究、とりわけ労働組合、労使関係研究から「管理」の観点が見落しているという問題意識を踏まえ、第二次大戦後、日本の重工業(造船業、鉄鋼業)が短期のうちに国際競争力を獲得した過程を、生産現場での管理体制(生産設計、現場監督制度、計画値管理)の改革に焦点を合わせた生産管理に関する研究という観点からは評価が高い。

ただ、選考委員からは以下のような不十分点の指摘があった。①本学会が社会政策を論じる学会であることを踏まえるとあまりにも労働者への観点が少ないこと、②管理を扱うことの学術、政策的意義がわかりづらいこと、③文章が難解であり、とりわけ序章の主旨などは、かなり理解しづらいことが選考委員から指摘された。こうした点から本書は奨励賞には至らないと判断した。

松尾孝一『ホワイトカラー労働組合主義の日英比較——公共部門を中心に』御茶の水書房  
2020年10月

本書は、ブルーカラー中心の労働組合運動研究に対してホワイトカラーの労働組合運動研究をすべく、日英の公共部門を対象とし、ホワイトカラー組合に関する理論と実践について検討し、ホワイトカラー組合の特質、意義、限界について論じている。本書の特筆すべきことは、中間層を代表するイギリスと日本の階層横断的なホワイトカラー労働組合という対比やホワイトカラー職の地位へのこだわりと、その裏面としての個別の労働状況の改善への感性の関心の低さという共通点などの興味深い知見が得られている。

ただ、選考委員からは以下の不十分な点が指摘された。第一に、本書が1999年に提出された博士論文がもとになっているということもあり、その後の研究の展開も一部踏まえられているが、特に2000年代後半からの新自由主義が中間層のホワイトカラーを下層化させ、労働組合の分化分解を加速化している今日的な状況を、この時代のホワイトカラー労働組合主義から、どう読み解くのか結語の中でも論じてほしかった。第二に、使われているデータや文献がかなり古いものであることがある。歴史研究という位置づけでないのであれば、2020年に刊行する前に近年のデータや文献でアップデートするべきであったのではないだろうか、といった指摘がなされた。以上のような点から本書は奨励賞には至らないと判断した。